

## 流れを読む

## そして何が変わる

荘銀総合研究所理事長 牧口 徳幸

新しい世紀入りと共に驚くべき変化が起った。小泉内閣の誕生である。力強い日本の再生へとつながっていくかはまだ分からない。解決すべき難題は多く、生易しいものではない。文字通り「死の谷」を越えて行かなければならない。何故驚くべき変化かという、五十五年体制、即ち自民党の誕生以来この党を支配して来た派閥政治が通用しなくなった事である。「黨員の反乱」のように見えるが、突き動かしているのは国民の意識である。国民は何に苛立っているのだろうか。出口の見えない長引く不況だろうが、不安はもつと深く厳しい。この国は本当に駄目になってしまっているのではないかという不安である。長期不況は表面現象であり、変化を促しているのは「国の在り方」だが、その答は世界史上空前の「奇跡の高度成長」の中にありそうだ。

石油ショック最盛中の一九七三年の秋だったと思うが、頭にターバンを被ったアラビヤ人にフランクフルト空港で出会った。私が日本人と知ると、「グレート・エコノミックサクセス（奇跡の経済成功）」と言った。彼等によって引き起された石油ショックで「日本沈没」が起りそうな時であ

る。外から見ると経済大成功なのだ。石油ショックまでの四半世紀日本は年平均一%成長し、文字通り「敗戦の瓦礫」の中から世界第二の経済大国にのし上った。それは日本人自身の予想さえ超えたものだった。六一年安保の激しい騒動の後成立した池田内閣は経済政策に集中し、「所得倍增計画」を打ち上げた。平均七%成長を達成すれば、十年で所得が二倍になるというものだ。結果は一〇%以上成長し、倍増は早期に達成された。それは何故だろうか。二十世紀が日本にとって極めて恵まれた世紀であったと考える。一つは工業社会が最盛期を迎えて開花した時代であり、もう一つは国家の役割が極めて大きかった事である。同じ物を大量に作る事によって効率性を競い合うのが工業社会だ。それを全国規模で上げて行くには国家の役割が極めて重要である。単一民族、同一言語で宗教的対立もない我が国は、世界一効率的な生産体制を作り上げる事に成功した。近代国家に例を見ない「民族の大移動」ともいふべき東京一極集中が行われ、それを終身雇用、年功賃金、系列、メインバンク等が支えた。まるで社会主義国家だ。幸いな事に体制としては資本主義国であり、企

業間、グループ間で激しい競争が行われた。しかしその競争は非価格競争であり、シェア競争であって可及的に倒産を避け、完全雇用と安全な社会を目指した。国家は経済的には閉鎖的、完結的であり、外国人や外国資本は可及的に排除された。こうして高度成長を続け、膨大な中産階級を生み出し、絵に画いたような大量生産、大量消費社会を作り上げた。同時に既得権に守られた利己主義的精神構造が構築され、公共の精神が忘れられた。

世紀末に訪れたポスト工業社会とも言うべき情報化社会は、こうした体制の変革を強く迫っている。既存システムは当然の事ながら、新しい時代の変化に対して極度の適応不能を起している。IT革命の発達に支えられたグローバルマネーは国境を越えて実物経済を支配しつつある。アメリカの繁栄とアジアの通貨危機は、「市場」が主役である事を示している。こうした傾向は暫く続く。市場が求めているのは優勝劣敗だけでなく、結果については責任だ。日本が閉塞感に陥っているのは責任逃れの精神の退廃、変らなければならぬのは、健全な公共的精神の再生である。